

## ある軍人婦人の引揚げ体験

執筆：山村幸　　整理：山田千里  
解題・編集：大野絢也、佐藤仁史

### 解題

本稿は、「満洲国」及び関東州において教育を受け、大連における教員生活を経た後、関東軍所属の軍人に嫁いだ一婦人である故山村幸氏が、ソ連と満洲国の国境地帯であった黒河近郊の山神府における敗戦やその後の引揚げの経験について記した三点の資料からなる。それらは、「昭和23年の手記」と題した書簡、「終戦の日から」と題した書簡、「悲しみは消えない」と題する手記の3点である。以下では、山村幸氏の経歴を踏まえたうえで、本手記の作成経緯について説明する。

#### 1 資料と出会った経緯

本稿で収録される三点の文字資料や途中で挿入する写真などとの出会う契機となったのは佐藤が一橋大学において2015年度に担当した社会史史料講読Ⅱという授業においてである。当該授業では、「満洲」からの引揚者が有した記憶の特質や変遷を理解するために、岡山ハルビン会

が発行した『わが心のハルビン』（1977年3月～1995年11月）の記事目録を作成し、主要記事の読解を行った。その成果は、佐藤仁史ほか編「岡山ハルビン会会報『わが心のハルビン』記事目録」として本誌第3号（2016年10月発行）に収録されているので、参照されたい。

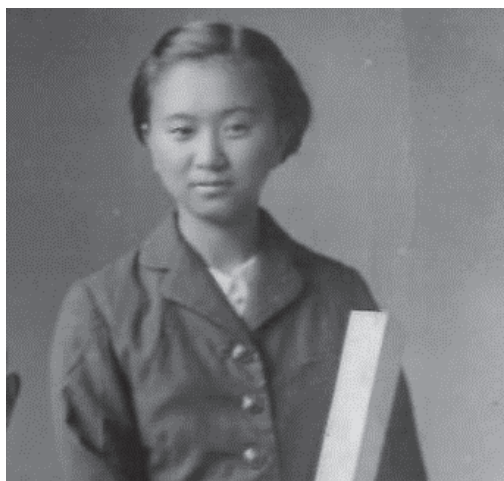
授業のなかで、12名の受講生のうち3名の親族に「満洲」をはじめとする「外地」からの引揚者がいることを受講生から知らされた。彼らのうち、社会学部2年の佐藤珠貴さんからは親族の引揚げに関する情報の提供、および山村幸氏のご令嬢である山田千里氏との面会の手配をいただいた。そして2016年2月11日に一橋大学の佐藤研究室において山田千里氏と面会し、資料の確認・調査を行った。その後、山田千里氏からは山村幸氏関連史料の提供と、本誌における公開を快諾いただいた。ここに記して謝意を示したい。

## 2 山村幸氏の経歴

山村幸氏は、1922年5月に茨城県真壁町で生まれ、1923年に大連へ両親とともに渡った。父親である上野義氏は満鉄職員であったため、転勤により小学校から高等女学校までの一時期安東にも居住していた。その後は大連に戻り、1939年に大連神明高等女学校を卒業後、奈良女子高等師範学校に入学した。1943年に同校を卒業し、再び渡満して大連芙蓉高等女学校へ教諭として赴任した。1945年6月に遼陽関東軍第1幹部教育隊へ所属していた予備役陸軍少尉の山村義房氏と見合い結婚し、教諭を退官した。その直後の7月初旬に、夫の転属のため新任地である満洲国黒河省山神府へ転居した。



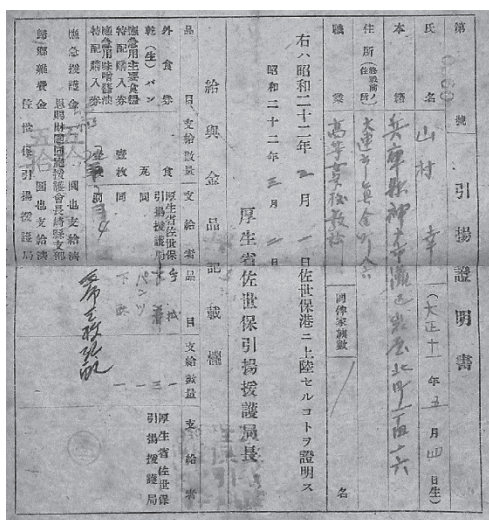
山村義房氏  
(撮影時期、場所は不明)



高等師範学校卒業時の山村幸氏  
(1943年、神戸にて撮影)



山村義房・幸夫妻の婚姻写真  
(1945年、大連にて撮影)



山村幸氏の引揚証明書



愛知県立第2高等女学校での記念写真

引揚げ後の山村一家  
(1952年、名古屋にて撮影)

1945年8月9日、ソ連の対日参戦によって山村幸氏は山神府に居住していた人達とともに引揚げることとなった。山村義房氏は、妻に事態を告げるとすぐに部隊に帰還した。その後捕虜となり、9月にはソ連へ移送されてシベリアに抑留された。一方、山村幸氏は、乗車していた列車が北安で停止し、そこで敗戦の日を迎えた。8月20日もしくは21日に武装解除となり、避難民として徒歩で長春まで移動した。満鉄本社に勤めていた叔父などを頼りながら、同年12月に実家のある大連へ到着した。そして、1947年2月に大連からの引揚船によって佐世保に入港し、山村義房氏の実家があった愛知県春日井市へ引揚げた。

山村幸氏は引揚げ後、1947年8月に愛知県立第2高等女学校へ勤務した。12月に山村義房氏がシベリア抑留から復員したことに伴い、1948年3月に退職している。その後も引き続き愛知県に居住した。2015年8月14日に山村幸氏が逝去されたことに伴い、本手記を含む遺品は山田千里氏ら遺族によって保管されることとなった。

### 3 資料の内容紹介

本稿に収録された資料1「昭和23年の書簡」、資料2「終戦の日から」、資料3「悲しみは消えない」は、それぞれ作成された時期は背景が異なっている。以下、その内容について概要を紹介する。

資料1「昭和23年の書簡」は、引揚げ

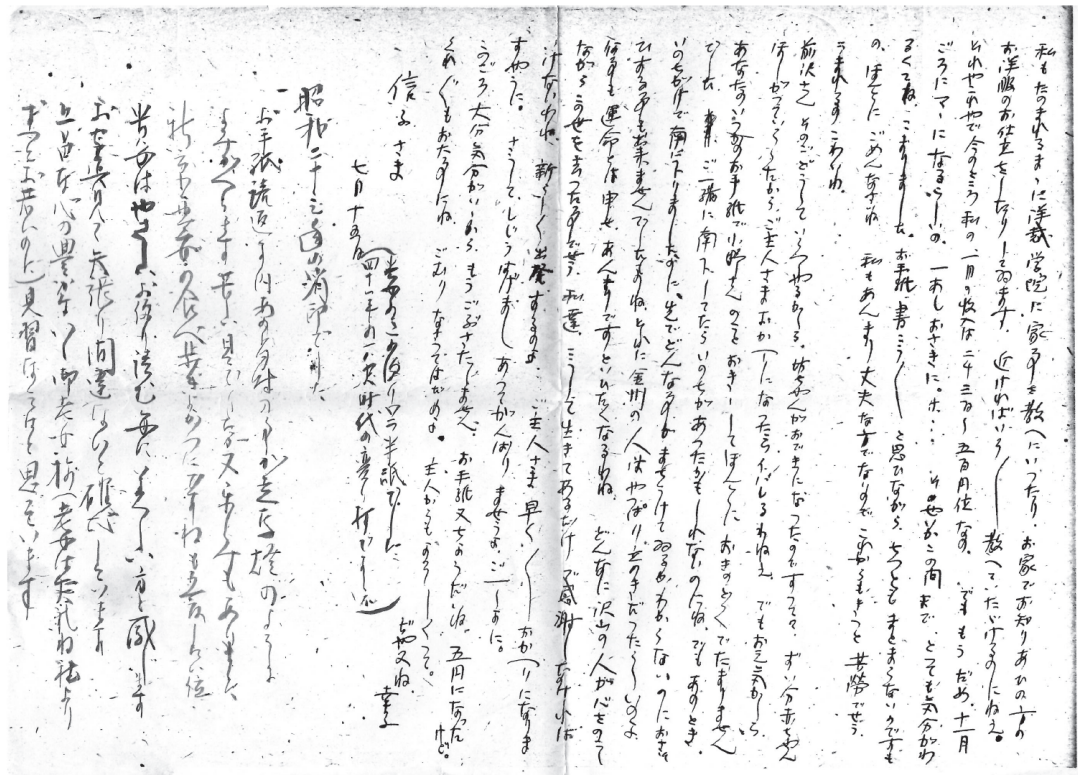
直後の1948年7月に山村幸氏から梶信子氏へ宛てて書かれた書簡の写しである。梶信子氏は山村幸氏と同じく、見合い結婚によって軍人の妻となり山神府に移住した。そして、夫が捕虜となった状況で山村幸氏と山神府からの引揚げ経験をともしていたため、女性同士の信頼関係があったと考えられる。書簡には内容に対する梶信子氏のメモも記されている。

資料2「終戦の日から」は、引揚げから約50年経過した2001年8月19日に書かれた、子息・尊房氏あての書簡である。内容は、山村幸氏が引揚げ時にお世話になったという人物の消息をたずねる書簡の

なかで、山神府からの引揚げ経験を詳細に回想したものである。

資料3「悲しみは消えない」は、山村幸氏が91歳となった2012年に記した回想文である。内容は「終戦の日から」と同じく山神府からの引揚げ経験を中心としているが、2001年と比較して記述内容が整理されている。

これらは異なる時期に回想されたものであり、語りかける相手も異なっていることが、山村幸氏の引揚げ経験の語られ方にどのような影響を与えているのかは極めて興味深い点である。



資料1 「昭和23年の書簡」の一部

## 凡例

- ・旧字体や異体字、略字、旧かな使いなどは、本資料としての性質を考え原文のまま掲載した。
- ・誤字と思われる箇所はそのまま掲載した。
- ・句読点、空白、改行は適宜記入した。
- ・本資料内のカッコについては、() の箇所は山村幸氏による注、〈〉の箇所は山田千里氏による注である。

## 資料 1

### 昭和 23 年の書簡

(山神府でご一緒だった梶信子様が、後にコピーして送って下さったもの。幼い自分がよく見えます)

大へんごぶさたしてしまひまして、ま  
っていらして下さいましたでせうに、ほ  
んとにごめんなさいね。

おからだのお具合は如何かしら。おあ  
ついでですから、お気をつけになってね。お  
やせさんでいらしたから心配です。

ご主人さま、まだかしら。もしかしたら、  
もうおかへりになってるかもしれないな  
どと思ひながらこれを書いてゐます。主  
人の会社の女の方のご主人もこの間おか  
へりになった方があってよ。もう一いき

の辛抱よ。おかへりになったら、それこそ、  
どんなによいでせう。おせいの高いお立  
派な方でいらしたわね。きっとお元気で  
ピンピンしておかへりになって、貴女の3  
年間のご苦勞をふきとばして下さるでせ  
う。お手紙よんでみて思はずポロポロと  
涙をこぼしてしまったのよ。私もおんな  
じでしたもの。でもきつときつと、くるし  
みやかなしみのあとには、それだけの大  
きなよろこびがあるものよ。ご主人さま  
だつて、どんなにどんなに貴女の事を思  
つてかへりたがっていらっしゃるか。3年  
まへのけふ、私達はあの思ひ出の山神府  
についたのよ。あやめや色々なお花が今  
をさかりとさいて美しいところでした。

そしてそれからの 20 日ほどが私の結婚生活でした。そして二年半。たった 20 日間の思ひ出だけを抱いて二年半。どんなに苦しんだでせう。私達、純然たるお見合い結婚で、それもあの時代でしたから、一日の交際もしなかつたのですもの。二年半もわかれてるまに私ね、なんだか結婚したといふ事がうそのやうに思へてくるやうになってしまったのよ。だから、貴女のお気持よりももっとみぢめでした。貴女は美しい思ひ出を沢山もって、何かにつけては思ひ出してなぐさめることもおできでせう。でも、たった二〇日間の事は(ほんとに?)二年半にのぼすとほんのちよっぴりしかないのですもの。でも、やっぱり待ってゐました。そして、まってあげようございました。

貴女が毎日毎日、ご主人さまの事を思っただけのお気持ちは必ずシベリヤまでとどいていてよ。ご主人さまがおかへりになったら、どんなにおよろこびになるかした。それは心配してたのです。生きてるか死んでるか永いことお互いにわからなかつたのですものね。

あゝ、早くおかへりになるといゝわね。でも、8月9日以来のこと、一わたりおしゃべりするのに一苦勞よ。何からいっていいかわからなくなつてしまふのよ。北安や新京でよくたべたわね。あのノートまだあるのよ。あれから丁度一年、あの日記ずっとつゞけました。でもあんまり淋しくななくなつたので(だっていくらおしゃべりしてもなんの反応もないので

すもの)お友達にも注意されて一年でやめました。そして又、引揚げて来てから書きつゞけてみたけど、よい記念になりました。いま一に、あのノートよんでは、あゝこんなころもあったのだと語り合う日も来るでせう。おばあさんになってよんだら、おもしろいでせうね。ウフフ。

なかなか生活も大へんよ。私達って、スツカラカンだから、きるものからお道具からそろへていかなければならぬでせう。とつても大へん。言ふまいと思ふけど、やいたものやとられたものが残念ね。貴女もご主人さまがおかへりになったら、又々、そうお思ひになってよ。でもまあ、私達は若いのですもの。これからなんですもの、がんばりませうよね。一月にどうしても一万円かゝるの。それで、私もたのまれるまゝに洋裁学院に家事を教へにいたり、お家でお知りあひの方のお洋服のお仕立てをしたりしてゐます。近ければいろいろ教へていたゞけるのにねえ。それやこれやで今のところ私の月の収入は二三〇〇~五〇〇円位なの。でも、もうだめ。十一月ごろにママになるらしいの。ひとあしおさきに。ほ・・・。そのせいかこの間まで、とつても気分がわるくてね、こまりました。お手紙書こう書こうと思ひながら、ちつともまとまらないのですもの。ほんとにごめんなさいね。私もあんまり丈夫な方でないので、これからはきつと苦勞でせう。うまれるの、こわいわ。

前沢さん、そのごどうしていらっしやるかしら。坊ちゃんがおできになつたの

ですって？ずいぶん赤ちゃんほしがっていらしたから、御主人さまおかへりになったらイバレるわねえ。でも、おげんきかしら。

貴女のいつかのお手紙で小野さんのことおき、して、ほんとおきのどくでたまりませんでした。ご一緒に南下してたらいのちがあったかもしれないのね。でも、あのとき、いのちがけで南に下りましたのに、先でどんな事がまってるか、わからないのに、おさそひする事も出来ませんでしたものね。それに金州のひとはやっぱり立ちのきだったらしいのよ。何事も運命とは申せ、あんまりですといひたくなるわね。どんなに沢山の人が心をのこしながらこの世を去った事でせう。私達、こうして生きてあるだけで感謝しなければいけないわね。新しく出発するのよ。ご主人さま早く早くおかへりになりますやうに。さうして。しじゅうはげましあってがんばりませうよ、ご一緒に。このごろ大分気分がいいから、もうごぶさたしません。お手紙またちょうだいね。五

円になったけど。

くれぐれもおだいじにね。ごむりなさってはだめよ。主人からもよろしくって。

ちゃ又ね。幸子

信子様

七月十五日

〈梶信子さんのメモ〉

昭和二十三年の消印でした。

お手紙読みかえすうち、あの当時の事が走馬灯のようによみがへります。苦しい日々でしたが、又楽しみもありました、新京・北安の食べ歩きよかったですね。もう一度したいくらい。

貴女のやさしいお便り読む毎に、美しい方と感じます。お写真見てやはり間違いないと確心しています。上品な心の豊かないい御老女様(老女は失礼ね、わたしよりずっとお若いのに)見習わなくてはと思っています。

## 資料 2

### 終戦の日から

八月十五日が来ました。

八月九日に黒河の奥の山神府で朝、ソ連の飛行機が飛びました。パパが「日本のものとは音が違う」と外に出てみました。そしてすぐ隊にかけつけたのです。

お昼近く（十一時頃）に帰って来てすぐ「避難」だとのこと。正午。

少しばかりのものを身につけて、官舎に火を放って南下しました。洪水のため北安で汽車は止まりました。

そして終戦をむかえたのです。貯金をおろそうと思って郵便局へ行き、詔勅をききました。

連絡は一切絶え、ここで死んだら、異民族の中で誰も私の死んだことさえわからないのだと思ったら、どっと淋しさにおそわれました。涙も出ませんでした。なすすべは何もなかった。

二十日、武装解除の日、すべて略奪されました。

新京に移され、小学校の教室に新聞紙を敷いて寝ました。途中、トボトボと歩く私達の長い行列に石や罵声が投げられました。

いつ終わるともわからぬ避難民生活。

みんな持金もなくなって来ました。家族を引き連れて南下させる為の将校さんは、隊から預かったお金を持って逃げました。毎日、赤ん坊から順に死んで行きました。小学校の庭に埋めるための穴掘りの使役も出来なくなるほど、そして、親が子供に何か盗んで来いと言い付けるほどでした。

私は十五日におろした貯金のおかげで、何とか生き延びていましたが、先が見えて来ます。

危ないけど乗り物は動いているとのことに、女学校の時の校長先生を訪ねて情報を得ました。子供の頃安東の家のお隣のおじさんが、そのころ安東省公署（県庁）の副（知事？）でいらして、終戦直前まで政府の興農〇〇（農林省）の副（次長？）（実質は大臣）、今は日本人居留民団の団長をしていること、まだ治安は何とか保たれているから訪ねてみるようにと言ってくれました。

次の日会いに行ったら、「家族（おばさんや子供達）は避難して居ないが、家は安全だからすぐ来るように」と言って下さ



り、一緒に山神府から来た人達の為にも、何とか手づるをつかみたいと世話役の人にも言って、危険地区も何とか危ないところをきりぬけて訪ねたら、一足違いでゲーペーウー（ソ連の憲兵）に連れて行かれた由。若い男達の中でゆっくりも出来ないで、一晩泊まって安全なところまで送ってもらって避難民の中に帰りました。

その後、帰国したら島崎さんをお尋ねして御礼が言いたいと思ひながら、帰って来てもお礼に何えるようなゆとりもなく、ご消息の調べようもわからず、とうとう今日まで来てしまいました。心苦しくてなりません。

尊房さんに頼みたいのは、国会図書館で調べられないかと思うのです。

おじさまも、青い中国服のよくにあうすてきなおばさまも、もういらっしゃらないと思うけど、私が女学校の一年ごろ、小学生だった秋子ちゃんと弟さんはお元気でいらっしゃると思うのです。

全てのものを失い、希望も何も持てなかったとき、ほんの一寸でも生きる力を

与えてくださったおじさまにお礼が言いたかった。ゲーペーウーに捕らえられてソ連に長く留め置かれたという噂でした。

私の戦後はまだ終わっていないのです。

その後もいろいろな方々に助けられ生きて来ました、

あのとき、みんな物は失ったけれど、心はずっとずっと豊かにしていただきました。すっかり物欲がなくなったので、かえって守られて逆に豊かになった気がします。

あそこで死んだ命だから、ひとの為に役立つなら何でもしよう！という発想にかかりました。かえって誤解をうけることもあるけどね。

当時、時間だけはたっぷりあったので、日記をつけていましたが、五十何年経って字はすっかり読めなくなりました。紙質も悪かったのね。

(2001年8月19日)

### 資料3

## 悲しみは消えない

昭和20年のことです。当時満洲国の北は黒竜江(アムール河)で、ソ連(ロシア)に接し、その対岸の黒河を少し高みに上ったところに山神府の部隊がありました。

この年の6月、当時旅順の教育隊の教官をしていた夫との縁談がまとまり、大連で結婚した私は、7月の初めに夫の新しい任地(国境の護りについてた部隊が沖縄戦にまわり、その後各地の教育隊が廻されたのです)山神府に参りました。

8月9日の朝、いつものように静かな朝食の時、突然飛行機の音。「おかしいな。日本の飛行機の音ではない。一寸様子を見に行ってくる」と言って、夫は部隊へ出かけて行きました。戻った夫に聞かされたのは「自分で持てるだけの物を持って、11時まで山神府の駅に集合せよ。将校1名、下士官1名を付けて家族を南下させる。ソ連が侵攻してきた。」と言う言葉でした。当時ソ連とは不可侵条約を結んでをりましたのに。まさかそんなことがあるとは…。夫の部隊は孫呉でソ連を迎え撃つと言う事でした。

野山は北国の短い夏を咲き急ぐように、見たこともない花も咲き乱れて、昨日ま

では、まるで天国のようでしたものを…。

持てる物には限度があります。僅かの時間にどれだけの準備ができればいいかと。とっさの判断で、経験のない北国の寒さ対策を思いました。

南下する列車に飛び乗って間もなく、窓から官舎に立ち上る大きな火の手が見えました。私の大事な京人形もあの火の中に消えました。和裁の比翼仕立ての練習の為に縫った卒業記念の人形の着物には、一針一針丹念に日本刺繍を施したのに。

「大切な物を済まない。必ず『償い』をするからね。」夫は呻くように申しました。

後で気がついたのは、「生きて帰る」とは云えなかった。約束はできなかったのです。行き先も判らず、唯、大連に実家があるのだけが頼みの綱でした。

途中北安で洪水の為に列車が止まり、そこで15日終戦、21日武装解除、直ぐに略奪と、思いも寄らぬ展開となりました。このまま、音信も途絶え、どこで果てたかも判らずじまいになるのか…覚悟を決めました。

満洲の冬は早いので、略奪の前に着ら

れるものは皆、身につけました。現地の住民は、日本人はお金もどこに隠すかよく知っていて、着物の衿、靴下等はすぐ剥ぎ取られました。紙幣は冬物の男ものの袴下の膝当てのようにして縫い込みました。チリ紙やノートの間にもバラバラにして挟み込みました。剥ぎ取られないように、水筒とバッグを肩から十文字にかけました。お陰で被害は最少でした。汽車が動くようになって新京へと送られ、小学校の教室に新聞紙を敷いて寝ました。身一つなら何とかありますが、子連れの人は大変でした。乳飲み子を持った人はお乳が出なくなり、「泣かすな」と怒鳴る人がいても如何ともし難く、やがて赤ちゃんから順に命を落として行きました。その屍を男の人達が校庭に埋めて、次の場所へ立ち去らなければならない。それはもう、むごいむごい光景でした。

新京では駅近くの小学校から郊外の元連帯の居た緑園と言う地区に移されました。長い道のりを、石を投げられ罵声を浴びせかけられながらトボトボ歩いて移動しました。そして全くの避難民となりました。開拓団の人達も次々に合流して来ました。1日に蜜柑の缶詰の空き缶に1杯の雑炊だけ、みるみる幼い人から順に命を落としてゆきました。母親が子どもに「何か食べるものを盗ってこい」と言いつけています。どこからも援助があるわけではなし、やがて大人も落後して行くようになりました。

昔女学校の2年生だった頃、お隣に住

んでいらして安東省次長(副知事)をしてをられた方が、その時、満洲国政府の興農部次長で、この度、日本人居留民団長をしてをられると聞きました。お隣で親しくして頂いたころの小母さまは、省庁の夜会のお迎えの車が来る時は裾の長いすてきな中国服でお出かけの、美しい方でした。小学校5年のお嬢ちゃんと3年の坊っちゃんがをられました。「お会いして見よう。何かお力が借りられるかもしれない」と、市内はまだ治安が保たれていましたから、1人で出かけました。幸い、すぐにお会いできまして、「大変な目に会ったね。とに角、家においで、考えよう。」と言って下さいました。「一旦もどりまして、責任者に話しまして」と約束して帰りました。2日程して伺いましたら、小父様はゲーペーウーに連行されたあとでした。留守番の方々は留まるように親切におっしゃって下さいましたが、やはり心苦しく、一晩泊めて頂いただけで帰りました。

途中、満鉄本社に立寄ってみようと思いつきました。ひょっとして叔父がいたらと思ったのです。たまたま、運よく叔父が出社していて会うことが出来ました。それからは叔父の手配で男装して貨物に乗せてもらうことになりましたが、なかなかその便がつかめず、待たされ続けて、無事大連に辿り着けたのは12月1日でした。

(2012年記 幸91歳)